

秋吉台カルスト地域に関する地理学的考察

大 和 明 子

秋吉台は山口県の中央、中国山地の西端にある面積130km²、標高約200~400m、北東-南西方向に長い平行四辺形の形で広がるカルスト台地である。本論文では、秋吉台及び周辺のポリエからなるカルスト地形の見られる地域を秋吉台カルスト地域とし、カルスト地形という特殊な地形が人間の生活にどのような影響を与え、また逆に人間が地形に対しどのような影響を与えているかを土地利用の面から明らかにすることを目的とする。

秋吉台は美祢市、美祢郡秋芳町、美東町にまたがっている。この3市町域は大化の改新の郡郷制度で1つの郡、美祢郡とされて以来、行政上1つの地域とされる事が多く、地形、地質等自然環境と共に人文的にも1つのまとまった地域といえる。

研究を進める上で、広義の秋吉台が厚東川で東西に二分される東半部を①秋吉台（狭義の）、西半部を②西台、台周辺の平野を③台周辺、と3つに地形で区分しそれぞれの土地利用を調べた。すると次の様に土地利用もほぼこの地域区分があてはまることがわかった。

①秋吉台は大部分が採草目的で人間の手で草地化され、毎年春の山焼きで維持されてきた。草原で見通しが良いため台上の利用が活発に行われた。カレンフェルト、ドリネ等カルスト地形も良く観察される。底の厚い土壌を利用するドリネ耕作、窪畑も多かった。現在は採草も窪畑も僅かである。明治時代から陸軍が演習場として使用。終戦後進駐軍に接収され、昭和31年米軍が爆撃演習場にしたいと申し入れ、大田演習場問題が起きた。地元は学術的価値の高い文化財を守ろうという基調で反対運動をし接収解除を勝ち取った。これがきっかけで秋吉台は天然記念物の指定を受け保護される様になる。現在は台上のカルスト地形と秋芳洞（秋芳町）大正・景清洞（美東町）の3つの鍾乳洞を観光資源とする観光業が繁栄している。町営である事が特色である。企業による開発と違い小規模な開発に留まっている。それが自然保護の面では却って良い結果となっているが、一方観

光地としての発展を制限している事も事実である。

②西台は森林に覆われている。居住も可能で江原と八見のウバーレに集落が立地している。大規模な石灰鉱山があり石灰石工業が盛んである。藩政時代から両台で肥料用に石灰石が採掘されていた。やがてセメント、製鉄原料としての需要が増え、大正時代に企業の採掘が始まる。更に西に大嶺炭田があった事、秋吉台と違い保護されていない事等の要因で西台で石灰鉱山の開発が進んでいる。地形改変の速度は速く、昭和54年の地形図では山の形の雨乞山が62年の空中写真では山頂が平らになっている程である。既に湧水が減る等の影響がでており今後鉱山の拡大と共にどのような影響がでてくるか興味深い。

①②に共通して牧草地がある。県畜産試験場と育成牧場である。未利用草地の有効利用のため作られた牧場では県下から牛を受託肥育している。又林業も共通で、台周縁やウバーレ集落の周囲にスギ・ヒノキの植林地がある。

③台周辺の平地は成因的にはカルスト盆地のポリエで、機能的に山間に開けた平野の機能を持つため、農地としては勿論人間の居住の場の機能が強い。台地や周辺山地の資源に関連した大理石加工業、石灰石工業、製材所等の立地もある。側壁付近ではカルスト地形特有の湧水や吸込穴が多い。河川もあり水が豊富で土地の大部分は水田で米作が農業の中心である。反面地下の石灰岩の浸食が進み排水が良好である。そのため溜め池も多い。秋芳町域では排水良好、アルカリ分の流入した土壌、台上の草、盆地の気候等の特質を生かし秋芳梨のブランド名で二十世紀梨を栽培している。

この様に秋吉台カルスト地域では行政区界を越えてカルスト地形に適応した居住、土地利用が見られる。中でもカルスト地形に適した利用は①の観光業、②の石灰石工業、③の梨栽培である。

人間の地形に対する最大の影響は②西台の石灰鉱山による地形の改変である。今後どのような影響が出てくるか興味深く見守っていききたい。